専修大学
図書館だより

第49号 2002.11

目次

文書の自由化（ボレッタ，ウィリアム）……2
おすすめの一角（高岡貞夫）……3
図書館の変貌（荻原幸子）……3
少国民世代が文献でたどった満州 —— 寄贈された「黒龍文庫」（新井勝紘）……4
「内田義彦文庫」の設置によせて（酒井　進）……5
私のお薦めこの1冊……6〜7
平成13年度図書館利用状況……7
としょかんインフォメーション……8

生田分館まえの鳳祭ステージ

今年も盛況だったオープンキャンパス
11月2日〜3日（生田本館）

文書の自由化

ボレッタ，ウィリアム
William Boletta

新しく大学を創設する際に、まず最初に建てる建物は図書館である――これは、1929～1951年にシカゴ大学学長を勤め、物議の対象ともなり有名となったロバート・メイナード・ハッチンズの見解です。ハッチンズの時代に、シカゴ大学は重大な変革を推進し、1939年にはフットボールチームを解散し、スタジアムを壊して、その跡地に図書館を建築しました。

ハッチンズは、教育の鍵はプラトンやアリストテレスから始まり現在まで引き継がれる西洋思想の伝統を汲む偉大な古典を読むことであるとしました。この「偉大な書物（The Great Books)」というアプローチはシカゴ大学を始め多くの大学で現在も採用されており、アメリカの教育における重要な基礎となっています。

ハッチンズが図書館を非常に重要であるとした理由は、彼が非常に重要であると考える書物を実際に所蔵している場所であるからです。つまり、図書館は、教育に必要な文書を所蔵する、いわば、学問の源でした。

図書館および印刷物は現在においても重要ですが、その役割および形状は急激に変化しています。この20年間に、文書の世界では、重要な変革がありました。コンピュータ技術の導入により、書物や、雑誌や学術論文集の文章はデジタルフォーマットで作成することができるようになりました。内容は同じでも、媒体は全く異なります。内容はもはや形状に縛られません。我々が文書をコンピュータに保存するとき、文書はページという概念から解放されます。この「文書の自由化」は、印刷された書物や文章をより手に入りやすく、フレキシブルにします。インターネットに接続したコンピュータがあれば、誰でも世界中のどこからでも文書を取り出すことができます。山手線に乗っていても、携帯電話で、世界各地のコンピュータに保存された文書をオンラインで読むことができます。この文書の自由化により、文書を保存し、様々な形でフォーマットし、必要ならば印刷し、音声に変換したり、画像やアニメーションを作成したりすることができるようになりました。しかし、最も重要なのは、オンラインでその文書を提供したり、世界中どこへでもEメールで配信することができるようになったことでしょう。

かつての印刷物や印刷媒体を所蔵する図書館は、今や、「電子図書館（Digital Library)」に変貌し、図書館の建物という概念も、書物のデータを保存する場所というふうに変わってきました。膨大量の文書がすでに電子化されています。例えば、ハッチンズの「偉大な書物」を参照したいのなら、インターネットで「Project Gutenberg」のサイトへ行けば、膨大な量の作品が既に電子化され、無料でアクセスできます。

図書館の、学生や研究者の生活における役割は大きく変わっていきます。将来、図書館へ行く、ということは、コンピュータのスイッチを入れることを意味するかもしれません。学問をするには格好の時代ですが、その恩恵を得るためには、皆が最新技術を取り入れて大いに利用することが必要です。

（ボレッタ，ウィリアム：文学部教授）

ESSAY

おすすめの一角

高岡　貞夫

大学一年の時に、いつも利用していた大学図書館に飽き足らず、少し離れたキャンパスにある学科付属の図書室を訪れたことがある。ところが本棚にぎっしりと並ぶ専門書のほとんどは洋書で、語学が駄目だった私はあわてて退散してきた。

その後、半年ほど避けていたその図書室に再び足を向けさせたのは、ある授業での小さな経験だった。

その授業で試験のかわりに課されたレポートは、ある英語論文の全文を日本語訳するというものだった。授業の内容と直接関係のない論文を愚痴をこぼしながら、辞書と首っ引きで苦労して訳した。

訳し終わって得たものは「洋書なんて恐くない」という感覚だった。外国語で書かれてあると、なにか難解な、あるいは高尚なことが書かれているような気がしていたが、それは誤解だった。再び学科図書室に足を踏みいれたとき、実際には歯が立たない本も多かったのだが、洋書アレルギーはすっかり消えてしまっていた。

生田図書館本館の中で、もっとも人が少なくて静かなのが2階の洋書コーナーであるように思う。もしもここが今まであなたの行動圏外だったなら、試しにのぞいてみてはいかがでしょう。少しずつ世界が広がるかもしれません。

（たかおか　さだお：文学部助教授）

図書館の変貌

荻原　幸子

昔話というものは「おばあちゃん」がするものだと思い込んでいた。ところがなんとしたことか。授業の中で、この私自身が、しばしば昔話の語り手となっている。「昔は読みたい本が図書館にあるかどうか、図書館でカードを一枚一枚めくって調べていたのよ」なんて言ってから思わず「でもそんなに遠い昔ってわけじゃないのよっ」と繰り返している。へぇ～というような学生の様子。私も祖母の昔話を、あんな顔で聞いていたのかな、と思ったりする。

コンピュータとインターネットの登場以来の、図書館の激変。ここ何年間かの専修大学図書館の変貌も、またしかりである。他大学の図書館の所蔵資料を検索できる、雑誌や新聞の記事を瞬時にして探し出すことができる、雑誌に掲載されている論文そのものを、パソコンの画面に呼び出して読むことができる・・・などなど。図書館を窓口として入手できる情報の量や種類は格段に増加し、ごく簡単な操作で必要な情報を手にすることができる時代になった。

私の研究テーマは「図書館とは何か」の探求だが、今のところ急速に変貌する図書館の姿をとらえるのに追われる始末である。もちろん興味は尽きない。さりとて・・・である。「書物の森をあてもなく散策し、どういうわけか立ちどまり、つい手が伸びて取り出した一冊の書物をゆっくりと味わう場所」という図書館の魅力。これはまたこれで、なかなかに捨てがたい。

（おぎわら　さちこ：経営学部助教授）

少国民世代が文献でたどった満州
―――― 寄贈された「黒龍文庫」

新井　勝紘

「さきの戦争」が終わって半世紀以上が過ぎ、最近は戦争を生身の肉体に刻印している世代の訃報がしきりであり、「さきの戦争」という会話が成り立たなくなりつつあるのもまた現実であろう。

そうした中で私は、戦争や戦時期に興味を持つ学生が逆に増えつつあることも感じている。生き証人が消えつつある時だからこそ、この問題に若い世代が関心を高めてくれることは大事なことだと思っている。

本学の生田図書館で最近寄贈を受けた中国・旧満州に関する五千冊余の“黒龍文庫”は、そうした研究を志す学生にとっては、恰好の文献になるだろう。旧蔵者は「北東アジア資料」というくくり方をしているが、日本が、1931年の満州事変を契機に中国東北部に侵略し、翌32年に傀儡政権として建国した「満州国」に関する文献群である。満州国は1935年には帝政をしき、以後1945年の日本敗戦まで、ながく日本人が政治の実権を握っていた国である。日中戦争を研究の射程に入れる時にはどうしても切り離せない歴史を刻んでいるのが満州である。

この文献群の本学への寄贈にかかわった者として、これからこの文庫を手にとるであろう利用者に、若干その経緯を述べておきたい。

このコレクションは、現在埼玉県草加市在住の高橋勇氏が、二十数年に渡って全く独力で蒐集してきたものである。1932年(昭和7)生まれの高橋氏自身は、少国民世代といえるが戦地で戦った経験があるわけではない。その高橋氏が満州に関する文献類を蒐集するにはどんな動機があったのだろう。直接お会いして寄贈の話を進めようとした時に、私はこのことを聞かないわけにはいかなかった。

高橋氏の兄が義勇軍として満州に2回行き、そこで結核にかかったために帰国し、戦後早くに亡くなったのだという。兄の所に面会に行った記憶が子ども心にかすかにあるという。その兄のことをもっと知りたい、自分が知らないことがもっとあるのではないかという思いが戦後次第に強くなったとも言っておられた。たまたま古書店で南満州鉄道株式会社(満鉄)の幹部だった人に会い、その人からもし集めるのだったら系統的に集めたほうがいいと勧められたのだという。市ヶ谷に職場があったので、時間があると神田の古書店街を探索し、一冊一冊購入していくうちに、いつしか数十冊になり、数百冊になり、数千冊という数になったのだという。その間に中国残留孤児の話が報道され、長い間肉親を求め続けていた彼らの姿を見るようになり、より強く関心を持つようになったとも言われた。自分の兄の姿と重なって見えたのだろう。ボーナスなどはその購入にほとんどつぎ込んだという。

本学に入る事になったこの文庫は、戦争をはさんでのこうした一人の少国民の執念とも言える歴史追体験の旅が刻まれていることを忘れてはならない。兄の体験を弟がたどる旅でもあった。

その意味で図書館に入ったあとも、高橋氏が敷かれた満州関係文献の収集のレールを何とか継続して、さらに充実させていく必要があると思っている。そうすることが貴重コレクションを無償で寄贈してくれた人への何よりの謝礼になるし、これを土台にしてこれから発行される新しい文献や関連の資料も追加収集されていくことになれば、歴史研究だけでなく大学教育にも利用されることが増えてくるのではないだろうか。

（あらい　かつひろ：文学部教授）

「内田義彦文庫」の設置によせて

酒井　進

内田義彦の蔵書3000冊余りが、本学図書館に寄贈され、“内田義彦文庫”が設置されるという。よろこばしいかぎりである。

内田義彦（1913－89年）は、大塚久雄（経済史）や丸山真男（政治学）とともに、戦後日本を代表する社会科学者の一人であった。

終戦直後の1946年に本学に入職した内田は、以後83年に定年退職するまでの37年間、経済学部で主として経済学史の講義を担当していた。彼の処女作『経済学の生誕』(53年)は、日本におけるスミス研究の水準を飛躍的に高め、すでに古典としての評価を確立している。

しかし内田は、せまい意味での学説史家にはとどまらなかった。彼は独自なマルクスの研究家として、また近代日本思想史の研究家として、それぞれの領域で第一級の仕事をなしとげたし、さらに特色ある学問論や芸術論のエッセイの書き手でもあった。内田はそれらの多方面にわたる仕事をつうじて、つねに、また一貫して市民社会を問題にしつづけた。その学問は、読者の一人一人に語りかけ、彼らに社会的主体としての自覚をはぐくみつつ、彼らが共同して市民社会を生み出すための産婆役として展開されたのである。

話が大上段になって恐縮だが、そうした内田の学問については、『内田義彦著作集』全10巻(岩波書店)を、また近刊の『内田義彦――時代と学問』(野沢・酒井共編著、岩波書店)を見られたい。

内田義彦は蔵書家でも愛書家でもなかった。彼の書斎には、専門研究に必要なテキストは一式揃えられていたが、学説史家がよく求める、高価な稀覯本や初版本の類はまったくなかった(定年退職にさいして処分された大部の蔵書のうちにも、それらはなかったと思う)。そういうことに、時間と精力を費やすことを内田は好まなかったのである。だからコレクターの眼には、内田文庫は魅力に乏しい、何の変哲もない文庫として映るであろう。

だが内田文庫の特徴は、そこにはない。目録を見ると、文庫の半数近くは専門以外の音楽や演劇、文学や芸術関係の図書でしめられている。内田が、新劇や音楽の熱心な愛好家であり、また文学への強い関心をもっていたことはよく知られていよう。そしてこの文学と芸術への傾倒は、彼の専門学問と無関係ではないのである。学問は、内田にとっては、文学・芸術とともに、一人一人の人間の個性的な人格の発露の一形式なのであった。形式こそ違っているけれども、学問と芸術の根っこには、作り手のみずみずしい個性や感性が息づいていて、内田はそのかぎり両者を区別せず、学問と文学・芸術の間を自由に行き来したのである。

内田は晩年の代表作『作品としての社会科学』(81年)で、社会科学の作物も文学作品と同様「作品」になりうるし、またならねばならないと説いているが、それは、文学と芸術を享受しながら、みずからの個性を専門学問のうちに生かそうとした彼にしてはじめて言いうることであろう。

内田文庫の特色ある構成は、そうした内田義彦の人と学問を映しだしているのである。

（さかい　すすむ：経済学部教授）

私のお薦めこの1冊

「テロリスト」がアメリカを憎む理由
芝生瑞和著　毎日新聞社　2001
（生田分館　J/319/Z00・神田分館　319.27/Sh19）

法学部法律学科(平成13年度卒)　**小松　賢司**

2001年9月11日、私の幼なじみの乗った飛行機がアメリカピッツバーグに墜落した。あの日から一年が経って私の中で大きく変わったのがアメリカの評価だ。アメリカ正義という考えがどれほど世界の人々の憎悪を買っているのか、そして、その憎しみが、関係の無い人に来て憤りを感じずにはいられなかった。

エルサレム問題やイラク問題などの多くの問題は、アメリカやイギリスに原因がある。この図書だけで判断したわけではないが、私の中でテロリストへの怒りと共にアメリカに対する怒りも増幅した。

私達日本人は、戦後アメリカが絶対なる正義の国だと認識してきた。しかし、世界ではアメリカに対して良く思っている人が意外と少ないという事は、あまり知られていない。

なぜアメリカは執拗に戦争をしたがるのか、なぜ世界の人々から嫌われているのか、この図書は、その答えが述べられている図書のうちの一冊であると私は思う。

カリスマ：中内功とダイエーの「戦後」
佐野真一著　新潮社　2001
（生田分館　X/080/Sh61/San）

文学部国文学科　**内田　智和**

この作品を手に取った時、「カリスマ」と「ダイエー」という言葉は、直接的には結び付かないように思えた。「カリスマ」は英雄的で一般とは離れたような言葉であり、一方の「ダイエー」は非常に庶民性の強い言葉であると思えた。

さてこの作品内で述べられている「ダイエー」は、戦後の高度経済成長期に巨大に成長し、バブル経済の崩壊とともに衰退、そして現在再建の途上にあるが、倒産の危機に瀕している状態の企業である。

この戦後日本経済そのものを体現しているとも言える「ダイエー」の創業者である、中内功を中心に綿密な取材によって、そのカリスマ像に迫った作品である。ここに表される中内功という人間の貪欲と強欲が、一企業を通して何を成し得たのか？借金のみを後世に残し終わったのか？ 読者の判断に委ねられると思われる。起業やビジネスに興味のある方、是非、一読をお勧めします。

死にゆく者からの言葉
鈴木秀子著　文芸春秋　1996
（生田分館　X/080/B89/Suz）

商学部商業学科　**石河　和明**

この本は、死にゆく者たちは自分に死の迫っていることを知っていて、残された日々に自分の人生の意味を振り返り、自分の人生の意味を見つけ、人生において未解決だったものを解決し、自分の人生に満足して死んでいくと言う話です。

筆者がキリスト教を信仰しているため、馴染みのない人には少し読んでいてひっかかる表現もありますが、実際に死んでいった人たちのノンフィクションな部分を読むとキリスト教的な考え方もあっていいんじゃないかと思えるような話です。自分が死ぬ瞬間に満足できるような人生を送りたいと、そのために今を精一杯生きていきたいと思いました。

死後の世界は存在しているとは私は思いませんが、筆者の書いたような死後の世界は幸せそのものです。

ラブアンドフリー：世界の路上に落ちていた言葉
文・写真：高橋歩　サンクチュアリ出版　2001
（生田分館　J/290/Z00）

商学部商業学科　**坂東　美耶**

この著者は、自分で本を書いて出したいと思い、書いた原稿を持って出版社をまわってもどこにも相手にしてもらえなかったので、自分で出版社を創って出版してしまったという面白い経歴の持ち主です。

その著者が1年8ヶ月の旅に出たときの詩と写真をまとめたものがこの本です。世界の人々との触れ合いから、わかったことや気づいたこと、変わっていく感情などが素直に表現されていて、とても素敵な詩がいっぱいあります。そしてプロではないけど、私達と同じ目線で撮ったいくつもの写真が私の一番のおすすめです。服を着ていない子供だったり、人が多すぎるバスだったり、普段私達が目にすることのない情景に改めて考えさせられるものがあります。

他にも高橋歩さんの本がいくつか図書館にあるので見てみて下さい。

忘れられた日本人
宮本常一著　岩波書店　1984
（本館・生田分館・神田分館　X/080/I95B）

経済学部経済学科（平成12年度卒）　**松本　幸一**

民俗学者・宮本常一のその調査方法は、足を使ったフィールド・ワークであった。宮本は日本中を歩き続け、その距離は地球を4周する16万キロに及ぶと言われている。

宮本は、戦前から戦後の高度成長期にかけ、とりわけ僻村や離島といった辺境に住む人びとの生活を記録してきた。『忘れられた日本人』は、そうした資料群のうちの一つである。

この本に登場する人物たちは、そこに暮らす何の変哲もない古老であり、ここに書かれてあることは、彼らの暮らしぶりである。ただ、それだけである。ゆっくりと話す老人、向かい合う宮本。古老たちの言葉は、現代に生きる僕にとって、もはや、まるで遠い世界の話としてしか映らない。が、時間が止まると言ったら良いのだろうか。

宮本自身も決して駆け抜けた生き方をしたわけではない。むしろ、その歩みは遅かった。何かに追われながら生きるのが当たり前の世の中、宮本の精神に触れるのも悪くない。

三姉妹探偵団8　人質篇
赤川次郎著　講談社　1985
（生田分館　X/080/Ko19/Aka）

商学部会計学科　**神谷　大輔**

私がオススメする本は、赤川次郎の三姉妹探偵団シリーズです。このシリーズは、どれも読みごたえがあるのですが、強いて挙げるならば第8弾の“人質篇”が面白いと思います。主人公である三姉妹それぞれの性格のユニークさが十分に映し出され、人質にされている長女・綾子と強盗とのやりとりが非常に興味深いです。

赤川次郎の小説が面白いワケは、非常に読みやすく書かれている点、独特の比喩表現、会話を主体とした軽快、スピーディーでイメージ喚起力の強い文体であること、他にもこの著者は殺人を殺人として、悲劇を悲劇として描かれているのにもかかわらず、ほのぼのと心あたたまるユーモラスでヒューマンな物語に変えてしまうスゴさが感じられます。少々主観的になってしまいましたが、この著者の名前だけしか知らない人や普段、小説にあまり触れる機会の少ない人もぜひ一度お読みください。そして読み終わった後の爽快感を感じてください。

平成13年度　図書館利用状況

区分		本館	生田分館	神田分館	合計
開館日数		265	264	266	−
入館者数		423,187	169,120	184,242	776,549
館外貸出冊数	経済学部	12,411 (34)	6,390 (0)	1,601 (1,472)	20,402 (1,506)
	法学部	2,880 (11)	2,765 (1)	14,192 (2,107)	19,837 (2,119)
	経営学部	10,784	5,551	83	16,418
	商学部	9,902 (55)	7,334 (4)	1,305 (1,146)	18,541 (1,205)
	文学部	20,756	9,417	93	30,266
	ﾈｯﾄﾜｰｸ情報学部	787	286	0	1,073
	聴講生等	173 (173)	17 (17)	12 (12)	202 (202)
	大学院生	8,026	284	4,190	12,500
	教職員	6,907	2,301	1,378	10,586
	その他	2,341	183	1,305	3,829
	合計	74,967 (273)	34,528 (22)	24,159 (4,737)	133,654 (5,032)

（ ）内は、二部学生で内数である。

としょかん インフォメーション

図書館カレンダー

日＼月	12月		1月		2月		3月	
1	日	休館	水	休館	土	休館	土	(*2)
2	月		木	休館	日	休館	日	休館
3	火		金	休館	月		月	
4	水		土	休館	火		火	
5	木		日	休館	水		水	
6	金		月		木		木	
7	土		火		金		金	
8	日	休館	水		土	休館	土	
9	月		木		日	休館	日	休館
10	火		金		月	休館	月	
11	水		土		火	休館	火	
12	木		日	休館	水	休館	水	
13	金		月	休館	木	休館	木	
14	土		火		金	休館	金	
15	日	休館	水		土		土	
16	月		木		日	休館	日	休館
17	火		金		月		月	
18	水		土	(*1)	火		火	
19	木		日	休館	水		水	
20	金		月		木		木	卒業年次生返却期日
21	土		火		金		金	休館
22	日	休館	水		土		土	休館
23	月	休館	木		日	休館	日	休館
24	火		金		月		月	大学院修了年次生返却期日
25	水		土		火		火	
26	木	休館	日	休館	水		水	
27	金	休館	月		木		木	
28	土	休館	火		金		金	
29	日	休館	水				土	
30	月	休館	木				日	休館
31	火	休館	金				月	

□ 本館・生田分館：9:00～21:00（土曜日 9:00～19:00）
　神　田　分　館：9:00～22:00（土曜日 9:00～22:00）
■ 本館・生田分館：9:00～17:00（土曜日 9:00～12:00）
　神　田　分　館：9:00～19:30（土曜日 9:00～14:30）

12月～3月の休館日

日曜日・祝日

12月26日（木）～1月5日（日）　冬期休暇

1月18日（土）　大学入試センター試験

(*1) 神田分館は開館します。

2月1日（土）　地区入試

2月8日（土）～2月14日（金）　一般入試期間

3月1日（土）　一般入試（二部）

(*2) 本館・生田分館は開館（9時～12時）

3月22日（土）　卒業式

※12月24日（火）、25日（水）は学部振替休講日ですが開館します。

冬期休暇に係わる返却期日の変更

対 象 者：学部学生

対象期間：12月2日（月）～12月19日（木）

返却期日：1月9日（木）

春期特別貸出

対 象 者：学部学生

取扱期間：1月6日（月）～3月20日（木）

貸出冊数：10冊まで

返却期日：4月10日（木）

※1月6日（月）～1月10日（金）
学部学生は貸出更新できません。

卒業・修了年次のみなさんへ

卒業・修了年次生の返却期日は次のとおりです。

卒業年次生　　3月20日（木）

大学院修了年次生　3月24日（月）

※卒業・修了後も本学図書館を利用することができます。くわしくは図書館カウンターにお問い合わせください。

春期休暇中の開館時間について

1月25日（土）～3月31日（月）

本館・生田分館：月～金　9時～17時
　　土　9時～12時

神 田 分 館：月～金　9時～19時30分
　　土　9時～14時30分

専修大学図書館だより　第49号

発行日：2002年11月25日
編集・発行：専修大学図書館　館長　毛利　健三

専修大学図書館　本　　館　神奈川県川崎市多摩区東三田2－1－1　〒214－8580　Tel. 044－911－1274（直）
　　生田分館　神奈川県川崎市多摩区東三田2－1－1　〒214－8580　Tel. 044－911－7138（直）
　　神田分館　東京都千代田区神田神保町3－8　〒101－8425　Tel. 03－3265－8339（直）
URL：http://www.senshu-u.ac.jp/　（専修大学トップページ）